

令和3年6月19日(土) 孔子と『論語』

中学で『論語』は触れるだけのようだ。が、儒教こそ東アジアで二千年以上にわたり正統的な教えとして語られ続けた教えだ。孔子は大聖人と言われる。他方、孔子は封建反動主義者とも見なされる。では、本当のところはどうなのか？ 孔夫子(こうふうし)はConfuciusとして西洋の事典に載っている。

「苛政は虎よりも猛なり」では、民の嘆きを思いやりよい政治をすべきとする孔子の姿を伝える。「人食い虎はまれにしか来ないが、苛政は四六時中人びとを抑圧する」「虎は人力で対応しうるが、苛政は、当時の民には、対抗し得ない」「現代は投票があるので苛政をひっくり返しうる」「現代は見えない形で監視や支配が浸透しているかも」

春秋時代の魯は周王室の親戚の国。孔子の父は孔子が3歳の時に亡くなった。孔子は母親の顔徴在のシャーマンの一族に育てられたかもしれない。顔回や顔路も弟子だから。孔子は2メートルの体格があったが、武人にならず学問に志した。小人の儒を超えて君子の儒、普遍的な学問と人間のあり方を目指したのか。孔子は魯の国で出世し国政改革に成功しかかるが、隣国の干渉に遭い挫折、中国を放浪、帰国後弟子を育て書物を整理したと言われる。晩年は愛弟子や子どもが亡くなったりした。孔子の弟子たちの中から、孔子と弟子たちの言行録『論語』が成立。

「学んで時にこれを習ふ…」以下は、『論語』冒頭にある。『論語』の配列は分かっているが、弟子たちが学ぶべき順番に配列されているのかも知れない。学而編冒頭のこの小論語は、『論語』のエッセンスが詰まっている。これが本当に分かれれば『論語』が分かり、儒教がわかり、ひいては東アジア三千年がわかる、と言われるほど重要な章句だ。そもそも君子とは何ぞや？ 何を何のために学ぶのか？ ここでは君子になる、つまり人格を完成し人びとを幸せにするために学問をすると言っている。孔子の学問は、貴族・官僚社会への就職のための技芸も教えたが、一番弟子の顔回は、どこにも就職せずひたすら学問に励んだ。現代ではどうか。「私は出世しお金持ちになりたい」「私は自分の知的好奇心を満たしたい」「教養を広げ高める学問もある」「専門を深める学問も」「神仏を知るための学問もある」「自然のワンダーを知るための学問もある」「社会のための経済学もある」「自分が儲けたらいい財テクの学問(?)もある」「病氣の人を助けたい、という医療や看護の学びもある」「科学の進歩に貢献したい人もある」「文化の蓄積に貢献したい人もある。与謝野晶子は『我も黄金の釘ひとつ打つ』と詠んだ「統治のための学問も」「道徳の完成を目指すものもある」「イスラム法学というものもある」

澹台滅明は行くに怪(こみち)に由らず、また公用でないと長官の部屋を訪れない、公明正大な人であった、については。「仕事も出来るがまず人として信頼できる人だった」「当時腐敗官僚で私腹を肥やす者が結構いたのかも」「ごますり役人が多かったのかも」「ごまをすらない彼をよとした長官も偉い」「俳優がゴマをすり大臣になって国を滅ぼす例は結構ある」「今なら大衆迎合のポピュリストのことか」「昔も今もゴマをすり不正をする人がいたということだろうが、他方正しいことをしようとする人もいた」「少数だと敗れ去る」「スクールカーストにおける女子の派閥争いはどうか」「正しい人をみんなして排除したりする」「孟子は正しい道をゆきむしろ『狂』と呼ばれたい、とした。吉田松陰もその類いか」「あまり奇矯なのはいけない。世論から浮き上がって孤立しても末路は悲惨だ」「どうやって一般の人にわかっていただくか、が大事になってくる」「民が賢くなることは大切だ」

「十有五にして学に志す」以下は。「これは孔子学派の教団で人生の目標にしたのかも」「現代日本でも十五歳や十八歳の人生の分かれ道を歌う楽曲も多い。椎名林檎も尾崎豊も」「十五歳というのは元服、成人式の年齢ということか。世界には様々な通過儀礼がある」「まだわからない。勉強はしたいと思う」「現代では就職して社会的に自立するのは三十歳ころか」

子路と顔回と孔子の対話。子路は友人との信義を語り、顔回は謙虚でありたいと語り、孔子は…。「会社での働く人の心構えとして、先輩には、後継者は育っているから安心して下さい、同僚には仕事で信頼し合える、後輩には相談ののつてもらえる、と解釈すれば現代でも通用する」「子路はよほど孤独で友人に恵まれなかったのかも？」「頼れる友を求めていた？」「子路の生育歴は？もしかしたら孤独な人だった？だからこそ朋友との絆にこだわった？」「孔子にくっついて歩いたのも同じ理由？」「中島敦『弟子』は必読」「信義は身内だけの狭いものか、普遍的に開かれたものか」「顔回の言う、年を取っても誇らず、と、孔子の言う、六十になつて耳従う、は、繋がっているのかも」

「文と質がそろつてはじめて君子だ」については。「舞姫」の太田は、日本で出世街道にいるときは、人間としての実質がなく、出世・国家建設のための表面的な知識しかなかった」「エリスとの事件があつてから後はどうか」「鷗外自身はどうか」「帝国日本自体が、うわべのかざりだけで、中身がなかったと言ふべきか？」「あいさつと身だしなみが完璧でも人を欺く結婚詐欺師。相手を尊敬しているからこそ口ごもつて挨拶が出来ないケース。身だしなみは悪く見えてもハートのよい人」「二休禪師はどうか」「人びとが真の仏法から離れているので、あえて覚醒させるために奇矯なことをしたのかも」

「巧言令色は仁が少ない」「剛毅木訥は仁に近い」はどうか。「明治の薩摩の軍人は無口で人に任せるタイプの大將がいた、と司馬遼太郎が書いている」「コミュニケーション力としきりに言いたがる時代だが、巧言令色なだけでは」「ヒトラーは弁舌で国民を扇動した」「デイビートは是非か。相手を打ち負かすのは、真に真理を目指す対話とは違う。ソフィストのやることであつて、フィロソフィアをする人のすることではない」「日本は巧言令色で黒を白と言いくるめる社会になつたのか」「最近の裁判ドラマを見てるとそうだ」

曾子の「我日に我が身を三省す」はどうか。「反省しすぎるとつらい。反省しない人の方が楽だ」「この三つが大事なんだろう。子ども論語塾にもあつた」「忠とは、上下関係ではなく、横関係のおもいやりだ。忠臣蔵とは違う。忠孝一本思想は、孔子から見るととんでもない思想」「親を置いて特攻で突入することを孔子は良しとはしないだろう」「この三点は日々気になる点でもあつたらう」「毎日意識的・自覚的に反省したのかも」「平凡に見えて、以外と実行が難しい三点だ。友人に適當なことを言つてしまうこともよくある」

他に、以下の諸点についても触れた。弟子の横顔。中国、日本の儒学年表。東アジア（ベトナムも含む）における朱子学の展開。江戸時代の「文」と「武」。文武両道とは。伊藤仁斎。松山の明教館の孔子像。天子様の姿に描いてある。今治の儒学。尊王攘夷。孔子には尊王はあるが攘夷はないのでは。むしろ周辺異民族を排除せずともに調和して生きようとするのでは。尊王攘夷という四字熟語は中国にはなく、幕末の水戸学の藤田東湖が作つた。誠とは。「松こそ至誠（真実）（まこと）の象徴」とは。作詞者は葛原滋。福山（譜代〓朱子学）の人だ。福山藩の藩校を誠之館と言う。渋沢栄一はなぜ『論語』を読んだか。大学入試のためではない。セレブに見せかけるためのファッションでもない。人間としての倫理的な覚醒があつたから読んだのだろう。人間としてよりよく生きるために、生涯をかけて読んだのだ。

魯迅が否定した儒学は、明清時代の体制教学化した、民を抑圧する儒教で、本物の孔子が見たら「私はそんなことは教えていません」というような代物だつたに

違いない。春秋時代からの連続性、不変性も見ろべきだが、他方、時代による変遷、断絶性も見ておく必要がある。